

テクニカル指標の手引き

テクニカル分析とは、過去の価格や売買高などの動きをグラフ(チャート)化して、相場の位置や方向性などを分析し、将来の価格を予測する手法の一つです。

本資料では、テクニカル分析の代表的な指標である、移動平均線、移動平均線乖離率、MACD、RSIの一般的な見方をご紹介します。

1 移動平均線

移動平均線は、一定期間の価格の平均値を算出した移動平均値を、グラフ上にプロットして描いた曲線です。平均をとる期間として、短期線(5日、25日など)、中期線(75日、100日、13週など)、長期線(150日、200日、26週など)が用いられます。

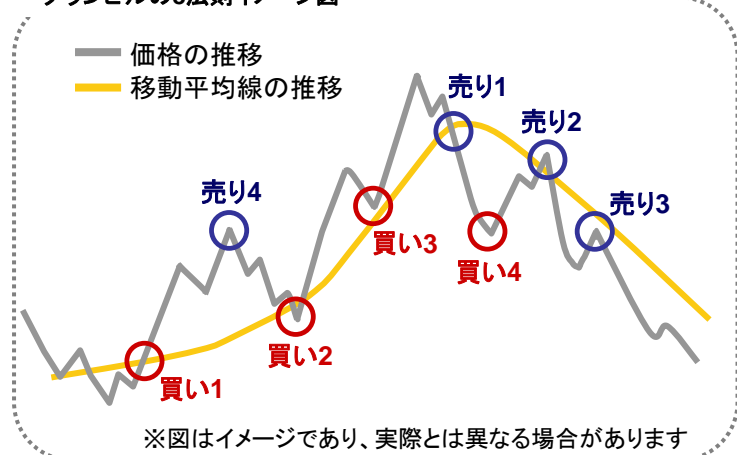
移動平均線は、相場の趨勢や転換点、あるいは売買のタイミングを判断する手掛かりに使われます。通常、価格と移動平均線を組合せるか、短期線と中期線、または中期線と長期線の移動平均線同士を組合せて使用します。

<移動平均線の見方①> 価格と移動平均線の組合せ

移動平均線の基本的な見方の中で代表的なものに「グランビルの8法則」があります。

移動平均線と価格の位置関係から「買いシグナル」と「売りシグナル」を読み取る手法で、米国のチャート分析家であるJ・E・グランビル氏によって考案されました(グランビルの分析には200日移動平均線が使われました)。

グランビルの8法則イメージ図



グランビルの8法則の見方

買いシグナル

買い1: 移動平均線が長期下落のあと横ばいとなるか、少し上向きかけている局面で、価格が移動平均線を越えて上昇に転じた場合(上昇基調への転換を示唆)。

買い2: 移動平均線を上回っていた価格が移動平均線を割り込んできた局面でも、移動平均線が上昇中の場合。

買い3: 移動平均線よりも上にある価格が足踏みの後、上昇中の移動平均線と接近するが、移動平均線を割り込むことなく再び上昇した場合。

買い4: 移動平均線が下降中でも、価格が大きくかけ離れて下落した場合。

売りシグナル

売り1: 移動平均線が長期上昇の後、横ばいとなるか、あるいは下降しはじめる局面で、価格が移動平均線を上から下へ割り込む場合(下降基調への転換を示唆)。

売り2: 下降中の移動平均線を価格が上回っても、移動平均線の下落が続いている場合。

売り3: 価格が足踏み状態、あるいは一時的に上昇し、下落中の移動平均線に接近してきたものの、移動平均線を上回れずに再度下落に転じた場合。

売り4: 移動平均線が上昇中でも、価格が移動平均線を大きく上に離れ過ぎた場合(高値警戒感から反落する可能性を示唆)。

※テクニカル分析は必ずしも絶対的な指標ではありません。ファンダメンタル分析など他の分析手法とともに、あくまで一つの参考と考えることが大切です。(信頼できると判断したデータをもとに日興アセットマネジメントが作成)

■当資料は日興アセットマネジメントがテクニカル分析についてお伝えすることなどを目的として作成した資料であり、特定のファンドの勧誘資料ではありません。また、当資料に掲載する内容は、弊社ファンドの運用に何等影響を与えるものではありません。■投資信託は、値動きのある資産(外貨建資産は為替変動リスクもあります。)を投資対象としているため、基準価額は変動します。したがって、元金を割り込むことがあります。投資信託の申込み・保有・換金時には、費用をご負担いただく場合があります。詳しくは、投資信託説明書(交付目論見書)をご覧ください。

<移動平均線の見方①続き>

なお、価格が移動平均線よりも上方向にある場合は、移動平均線が価格の下げ止まりの転換点として機能する支持線となる傾向が見られます。反対に、価格が移動平均線よりも下方向にある場合は、移動平均線が価格上昇の抵抗線となっている場合が多いようです。

<移動平均線の見方②>移動平均線同士の組合せ

短期線と中期線、中期線と長期線といった2つの移動平均線の交差の仕方から相場動向を探る代表的な手法として、「ゴールデンクロス」「デッドクロス」があります。

「ゴールデンクロス」「デッドクロス」の見方

ゴールデンクロス

過去の経験則では、相場が底入れから上昇に転じると、まず短期の移動平均線から上向きに転じ、相場の上昇が続くに従って長期の移動平均線が上昇基調に転じます。

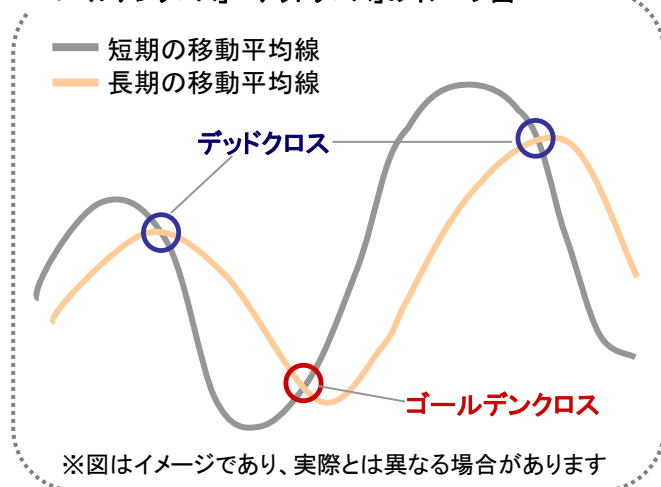
この過程で短期の移動平均線が長期の移動平均線を下から上へ突き抜けた点を「ゴールデンクロス」と呼び、相場が上昇基調に入ったことを示すシグナルとして利用されています。

デッドクロス

相場の上昇が止まり、相場が下降しはじめると、移動平均線は短期の移動平均線、長期の移動平均線の順に下がり始めます。

この過程で短期の移動平均線が長期の移動平均線を上から下に突き抜けた点を「デッドクロス」と呼び、相場が下降局面に入ったことを示すシグナルとして利用されています。

「ゴールデンクロス」「デッドクロス」のイメージ図



※テクニカル分析は必ずしも絶対的な指標ではありません。ファンダメンタル分析など他の分析手法とともに、あくまで一つの参考と考えることが大切です。（信頼できると判断したデータをもとに日興アセットマネジメントが作成）

■当資料は日興アセットマネジメントがテクニカル分析についてお伝えすることなどを目的として作成した資料であり、特定のファンドの勧誘資料ではありません。また、当資料に掲載する内容は、弊社ファンドの運用に何等影響を与えるものではありません。■投資信託は、値動きのある資産（外貨建資産は為替変動リスクもあります。）を投資対象としているため、基準価額は変動します。したがって、元金を割り込むことがあります。投資信託の申込み・保有・換金時には、費用をご負担いただく場合があります。詳しくは、投資信託説明書（交付目論見書）をご覧ください。

2 移動平均線乖離率

相場の変動によって、過去の一定期間の価格の平均値である移動平均値と価格の間には乖離が生じます。移動平均線乖離率は、その乖離の度合い(価格と移動平均値がどのくらい離れているのか)を割合で示した指標で、「移動平均線に対する価格の大幅な乖離(上方・下方)はいずれ修正される」という経験則に基づいて、相場の行き過ぎを判断するために使用されます。価格と移動平均線が同じ位置にいる場合、乖離率は0%になります。

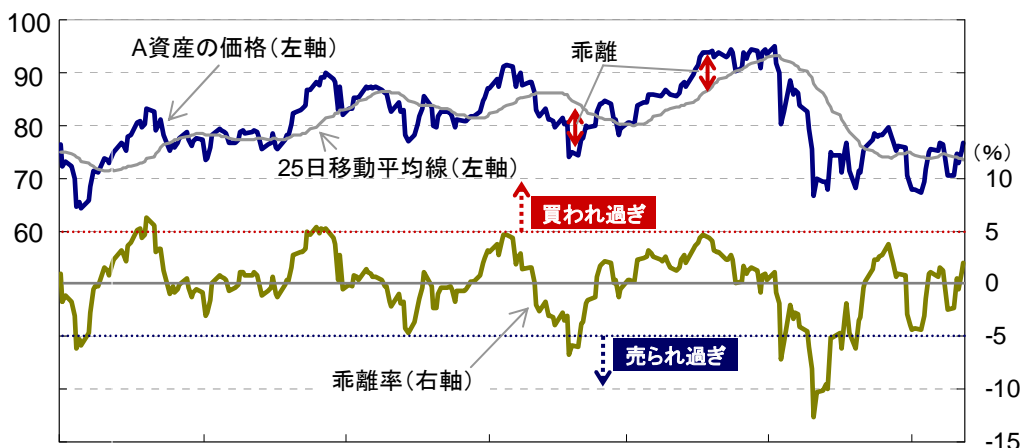
<移動平均線乖離率の見方>

一般的に、価格と移動平均値の乖離が+5%以上になると相場が目先調整局面を迎え、+10%以上になると天井圏という経験則があります。反対に、▲5%以下になると相場が目先反発に転じやすい傾向にあり、▲10%以下になると底値圏であるとみられています。

ただし、移動平均線乖離率が、何%ならば天井で、あるいは底値なのか、ということは一概に言えません。また、移動平均の期間の取り方によっても目安となる乖離率は変わってきます。過去の様々な相場の値動きを参考に、おおよその乖離率の上限や下限、あるいはどのくらいの乖離率で相場が反転する傾向があるかなどを自身で研究してみるとよいでしょう。

移動平均線乖離率のイメージ図

(例)A資産の価格とその25日移動平均線、およびその乖離率の推移



※図はイメージであり、実際とは異なる場合があります

※テクニカル分析は必ずしも絶対的な指標ではありません。ファンダメンタル分析など他の分析手法とともに、あくまで一つの参考と考えることが大切です。(信頼できると判断したデータをもとに日興アセットマネジメントが作成)

■当資料は日興アセットマネジメントがテクニカル分析についてお伝えすることなどを目的として作成した資料であり、特定のファンドの勧誘資料ではありません。また、当資料に掲載する内容は、弊社ファンドの運用に何等影響を与えるものではありません。■投資信託は、値動きのある資産(外貨建資産は為替変動リスクもあります。)を投資対象としているため、基準価額は変動します。したがって、元金を割り込むことがあります。投資信託の申込み・保有・換金時には、費用をご負担いただく場合があります。詳しくは、投資信託説明書(交付目論見書)をご覧ください。

3 MACD（移動平均収束/発散法）

MACD(Moving Average Convergence Divergence＝移動平均収束/発散法)は、直近の値に重みをつけた2つの平滑移動平均線を使用し、相場の周期とタイミングを計る指標です。平滑移動平均線は、通常、12日と26日の平滑平均を使いますが、その差をMACDと呼びます。MACDの一定期間の移動平均線(通常9日)をシグナルと呼び、MACDとシグナルの2本の線の水準やクロスの方で、相場の強弱や方向性を判断します。

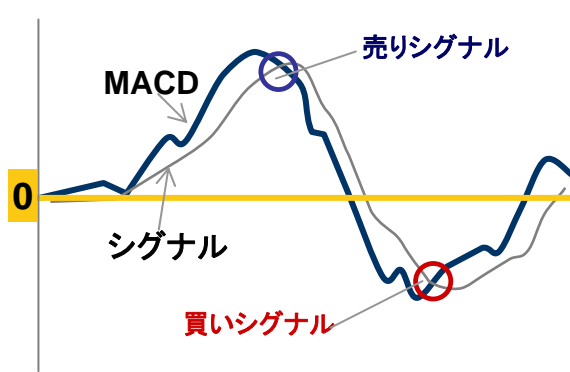
<MACDの見方>

MACDはシグナルよりも早く動くので、基本的には、先行するMACDが遅行するシグナルを下から上に抜いた時を「買いシグナル」として、反対に、先行するMACDが遅行するシグナルを上から下に抜いた時を「売りシグナル」として利用します。

もう一つの見方に「0(ゼロ)」を基点とする方法があります。MACDがプラス圏内では相場は上昇トレンドであり、マイナス圏内では下降トレンドであるという大局的な見方をします。

また、MACDが相場の流れに逆行した場合は、相場の天井や底が近いことを示すとされています。例えば、相場が下落しているときにMACDが上昇しはじめた場合は、近い将来、相場が底を打つ可能性があるかと判断されます。

MACDのイメージ図



※図はイメージであり、実際とは異なる場合があります

※テクニカル分析は必ずしも絶対的な指標ではありません。ファンダメンタル分析など他の分析手法とともに、あくまで一つの参考と考えることが大切です。 (信頼できると判断したデータをもとに日興アセットマネジメントが作成)

■当資料は日興アセットマネジメントがテクニカル分析についてお伝えすることなどを目的として作成した資料であり、特定のファンドの勧誘資料ではありません。また、当資料に掲載する内容は、弊社ファンドの運用に何等影響を与えるものではありません。■投資信託は、値動きのある資産(外貨建資産は為替変動リスクもあります。)を投資対象としているため、基準価額は変動します。したがって、元金を割り込むことがあります。投資信託の申込み・保有・換金時には、費用をご負担いただく場合があります。詳しくは、投資信託説明書(交付目論見書)をご覧ください。

4 RSI（相対力指数）

RSI(Relative Strength Index＝相対力指数)は、米国のテクニカル・アナリストのJ・W・ワイルダー氏が開発したテクニカル指標で、相場の「売られ過ぎ」、「買われ過ぎ」などのサインを読み取り、売買のタイミングを計ろうとする分析手法です。

計算は比較的単純で、過去一定期間の上げ幅(前日比)の合計を、同じ期間の上げ幅の合計と下げ幅の合計を足した数字で割って、100を掛けたものです。0%から100%の範囲で推移します。

計算式

$$RSI(\%) = \frac{\text{一定期間の上げ幅(前日比)の合計}}{\text{一定期間の上げ幅の合計と下げ幅の合計}} \times 100$$

<RSIの見方>

RSIは、中間点を50%とし、100%に近づくほど買われ過ぎ、0%に近づくほど売られ過ぎとみます。一般的には一定期間として14日を用いることが多いようです。その場合、RSIが70%以上で買われ過ぎゾーンに、反対にRSIが30%以下で売られ過ぎゾーンにあるとされています。

また、30%以下で推移していたRSIがその水準を上抜いてきた場合には買いシグナル、70%以上で推移していたRSIがその水準を下回ってきた場合には売りシグナルとして使用します。

RSIはある一定の値幅の中で、相場が買われ過ぎの状態にある、あるいは売られ過ぎの状態にあるという時には有効なシグナルとなりやすいものの、相場が今までとは違う大きなトレンドで上昇し続けたり、下落し続けたりする場合には、RSIが70%を超えても相場の上昇が続いたり、30%を下回っても相場の下落が続くこともあります。

RSIのイメージ図



※図はイメージであり、実際とは異なる場合があります

※テクニカル分析は必ずしも絶対的な指標ではありません。ファンダメンタル分析など他の分析手法とともに、あくまで一つの参考と考えることが大切です。(信頼できると判断したデータをもとに日興アセットマネジメントが作成)

■当資料は日興アセットマネジメントがテクニカル分析についてお伝えすることなどを目的として作成した資料であり、特定のファンドの勧誘資料ではありません。また、当資料に掲載する内容は、弊社ファンドの運用に何等影響を与えるものではありません。■投資信託は、値動きのある資産(外貨建資産は為替変動リスクもあります。)を投資対象としているため、基準価額は変動します。したがって、元金を割り込むことがあります。投資信託の申込み・保有・換金時には、費用をご負担いただく場合があります。詳しくは、投資信託説明書(交付目論見書)をご覧ください。